

巻 頭 言

「北海道の雪氷」の役割

副支部長 白岩孝行 (北海道大学 低温科学研究所)

昨年より金田安弘さんの後任として副支部長となりました白岩孝行です。強力な理事会の皆様にご教を乞いながら、なんとか独り立ちすべく頑張りますので、皆様のご協力をお願い申し上げます。

10 数年ぶりに関わることになった北海道支部ですが、その活動の活発さには驚きました。支部研究発表会が二日間にわたって行われるようになったことを始めとし、地域講演会を中心とするアウトリーチ活動は盛んであり、なにより、メーリングリストを通じた会員や理事会メンバーの活発なやりとりには大変驚きました。まさに支部活動が雪氷学会を支えるという、本学会の本来の姿を再確認させていただきました。

とりわけ、「北海道の雪氷」という支部機関誌は、ちょっと前まで風前の灯火だろうと考えていた私の浅はかな予想を裏切り、かくも立派な機関誌として毎年発行されていることはうれしい驚きでありました。ひとえに、本誌を支えてくださっている支部会員の皆様と、本誌の編集作業に多大な努力を払って下さっている舘山一孝さんを始めとする歴代の編集チームの献身的なご努力のお陰と感謝申し上げます。

最近、私の所属する職場で業績の自己評価を行うにあたり、評価の対象を英文の査読付国際誌に限るといふかなりショッキングな出来事がありました。つまり、「北海道の雪氷」に書かれた報告はおろか、学会の顔である「雪氷」に掲載された和文論文なども、業績評価の対象にならないという決定です。ちょっとびっくりされる方もいらっしゃると思いますが、現在の自然科学の世界では、むしろこの考え方のほうが常識なのかもしれません。

翻って、北海道の雪氷を見返してみると、私の周囲にいる研究者についてみた場合に限りませんが、自身とその指導学生を含め、北海道の雪氷にも積極的に報告を載せていることがわかりました。つまり、国際誌で多くの業績を挙げている研究者は、和文でも良く書いている、ということが言えるかと思います。おそらくは、北海道の雪氷を、より高いレベルの媒体に進むための媒体として利用しているわけです。

誰もが一足飛びにインパクトファクターの高い国際ジャーナルに論文を投稿できるわけではありません。研究が一步一步進んでいくように、報告や論文を徐々にレベルアップしていくのが普通だと思います。この意味で、大学院生の皆さんには是非お願いしたいのですが、北海道の雪氷を次のステップへ登るための踏み台にして欲しいと思うのです。

最後になりましたが、舘山一孝理事を始めとする本誌の編集委員の皆様、そして研究発表会にご参加いただきました会員の皆様には、この場を借りて厚く御礼申し上げます。